

源氏大鏡の叙述方法

——帚木卷の梗概化を中心にして——

稻 賀 敬 二

一、△源氏大鏡の類Vの輪廓

本稿は「源氏大鏡とその諸本」(広島大学文学部紀要23号)及び「源氏大鏡成立攷」(未発表)に続くものである。私は前稿に於て、次の様な事を述べた。

現在まで私の調査し得た、「源氏大鏡」「三帖源氏」「浅聞抄」「無外題」「光源氏一部之歌」その他の名を冠した、源氏物語の梗概書約二十部は、共通的特質として

A、最初に「源氏物語のおこり」乃至それに類する、紫式部の源氏物語執筆の動機などを述べた序文がある。

B、桐壺より夢の浮橋に至る諸巻の梗概を、巻中の和歌を網羅し、引歌・故事・語釈を加味して敘する。

この共通点を有する諸本を、仮に各書の表題とは無関係に系統分類すると、ほぼ四類に大別出来る。これら四類を、私は△源氏大鏡の類Vと呼んで、△源氏小鏡の類Vその他の梗概書と区別したい。

此等四類中、第一・二・三各類は、各所に所屬する諸本別に性格が共通するが、第四類は便宜上、前記三つの類に入らぬ雑多な諸本を一括した。第一類・第二類・第三類を諸種の角度から比較検討すると、この中で第一類本の形態が、第二・三類より早く成立したと考へられる。更に第四類本の一本、鳥原松平文庫藏「光源氏一部歌」と第一類本を比較すると、両者の関係は、第一類本の外に△源氏小鏡の類Vをも参考にして、此等を集成的に取捨して成ったのが松平文庫本と考へられる。此の推定が正しければ松平文庫本の書本の奥書には「享徳二年」の識語があるから、その材料の一つとなった△源氏大鏡の類V第一類本の祖本乃至母体をなすものは、既に享徳二年(一四五三)以前に成立してゐた事となる。以上の如き点を前稿で述べた。

△源氏大鏡の類Vは、その中に源氏物語本文を或る時は長文に涉つて、或時は部分的に引用する所があり、これらから足利時代乃至それ以前に行はれてゐた源氏テキストの傍を知る事が出来る。又、

梗概化するに當つて、源氏物語中の和歌に中心が置かれた事は、或る程度まで予想されるが、その他に、物語のどの様な点に深い関心を持って梗概を纏めてゐるか、と云ふ事を検討すれば、中世に於ける源氏享受の夷態の一端を明かにする一助ともならう。

二、△源氏大鏡の類V第一類本桐壺卷末・帚木冒頭 の關係及び帚木卷の本文

前稿で述べた様に、△源氏大鏡の類V第一類本桐壺卷は梗概化に當つて、多少の記事順序の改変はあるが、最も特徴的なのは、桐壺卷の梗概を、光源氏の元服、葵上との結婚の所で終りにして居る点である。換言すれば、光源氏の一生にとって最も重要な事件である藤壺との出会ひが、全く記されてゐないと云ふ事である。勿論、藤壺の素姓や入内の経緯などにも全くふれないのである。これは梗概を纏める上に、重大な手落ちと申さねばならぬ。この理由は、恐らく、桐壺卷の藤壺關係の記述の部分に和歌が全くない事に起因するのかもしれない。△源氏大鏡の類Vは卷中の歌はすべて網羅し、その歌の詠まれる場面・事情を綴りながら梗概を記する体裁を取る。だから、和歌を含まぬ藤壺關係の部分は、略してもよい、と云ふ事になつたのだと云ふのが一つの説明である。

だが、一方、桐壺卷の中で全く歌を含まぬ源氏と高麗の相人との場は、細かに梗概を記してゐる。この部分は、光源氏の将来の身分を暗示する長篇的構想の骨子をなす部分である。とすると、歌を含まぬ部分でも、梗概作成者は、自己の判断で必要と認めたと部分はこの取り上げてゐる事になる。

では、藤壺關係の記事を全く取り上げなかつたのは、梗概作成者

の云はば近視眼的な視野の狭さを示すものであるのか。更には、中世の読者は、藤壺事件が長篇的構造の中で果す重要な役割を、今日程には意識してゐなかつたのであらうか。説みが浅かつたと云ふ事であらうか。

必ずしも此の様に考へる事は出来ない。△源氏物語の類V第二類本（刈谷図書館本浅間抄など）では、第一・三類本と同趣の記事の終つた後に、「又、此卷に輝く日の宮と申し奉るは」云々として、藤壺の素姓・源氏との交渉を述べてゐるからである。第一・三類本と第二類本との關係は——第二類本すら享徳二年以前に成立したかと思はれる証があるにもかかわらず——第一類本の形態が、第二類本より古く成立したと考へられる事、既に前稿に述べた通りであつて、第二類本の祖本の作成者は、桐壺卷に藤壺關係記事を落す事が梗概化として極めて不完全である事を知つて居たはずである。故に、中世の読者一般が、藤壺關係の記事の構想的重要性に盲目であつたと見る事は、極論に過ぎる。

こゝは、矢張り梗概作成者の技術的な面の方に關係すると見るべきである。即ち、藤壺關係の記事を桐壺卷に述べるよりは、帚木冒頭の、雨夜の品定の前に、「しのぶのみだれや」とある引歌の部分、梗概中に組み入れるために、この引歌との関係の下に藤壺の事を述べる方が、簡にして要を得た梗概を書き得ると判断したものと見たい。第一類本帚木冒頭は次の様になつてゐる。

源氏此卷に中将と聞ゆ。御まませに藤壺の輝く日の宮と申すは、先帝の女四の宮にておはしますを、桐壺の更衣のかたち似給へる故、御門へ召しあり光源氏と同じやうに時めき給へば、世の人輝く日の宮と申しける。其御かたちをのみ源氏は御心にしめてお

ぼしめして、大殿の御そひふしの姫君をば御心にとどめ給はずしのおのみだれやと、引歌、春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られずと云ふ歌の心也。

一、此巻に品定めといふ事あり(以下略。松浦家慶長八年奥書・松浦資料博物館蔵本をもととして、諸本により本文を定めた。以下同様)

ここに見られる様に、藤壺関係の記事をここで扱はぬ限り、「しのおのみだれや」の引歌説明が全く宙に浮いた形となる。かと思つて桐壺巻末に藤壺関係の記事を、物語本文に従つて記載したのでは、再度それを帚木冒頭に繰返すのが、梗概としては極めて煩雑な形式である。依つて梗概作成者は、技術的に、藤壺関係の記事を桐壺巻では省略すると云ふ断を下したものと思はれる。物語中の全和歌を網羅するに留まらず、引歌・故事の説明をも可及的に加へようとする梗概作成者の基本態度から見ても、この処置は当然と見られるものであった。(ここで、この分割の方法と、梗概書が依拠する源氏テキストが、別本系統のそれらしい事、及び、定家の奥入に見える「輝く日の宮」の巻を組合せて、種々の想像を行ふ事も出来るが、恐らくはうがち過ぎであらうし、資料不足の感がある)

帚木巻の梗概化は、先に引いた例に続いて次の様に書き始められる。「つれづれとふりくらしたるよひの雨に殿上にもおさおさ人すくな也」(三六五)源氏大鏡の類V第一類本本文中、源氏テキストからの引用と目されるものには、該当部分の頁数行数を源氏物語大成によつて示した。傍線部は源氏諸本と異なる異文の部分である。梗概の進展は必ずしも原文の順にならぬ事は桐壺巻と同様であつて、例へばこの「つれづれと」の行文の後へ頭中将の説明を書く。

而して「世にすぎがましきあた人なり」(三六一・河内本)の様に、引用文が河内本に一致する所が多い。この部分、青表紙本系統では「世に」の二字がない。「てんがにはしりひき」(四七14・河内本、別本系の陽明家本)の様に、河内本・別本と共通異文を持つ場合もある。

① 又、絵所にも ② 眼に見えぬ蓬萊の山、もちこし(以上四字一本「からくに」)のはげしきげだもの、荒海のいかれるいをの姿、
③ 鬼の顔などは

この例は、①は四七4、この次を略して②「人の見及ばぬ蓬萊の山」(四七6)へ続け、③「から国のはげしきげだもののかたち」(四七7)、④(四七6)、⑤「眼に見えぬ鬼の顔など」(四七7)の様に、語順を狂はして綴つた例である。②の「眼に見えぬ」の語とすれば、まことに煩雑な手順で原文を引用した事となる。源氏物語大成所収の諸本には源氏大鏡の類Vの如き本文を持つ本が見当たらないが、或は、中世に斯る本文を持つ別本系の本が存在してゐたのかもしれない。桐壺巻はやや別本系統に近かつたし、若紫巻には現存諸本若紫巻に見えぬ「しわふる人」と云ふ特殊語彙を含んだ源氏テキストが使用されてゐるかと思はれる例もあつた。とすれば、帚木巻でも、源氏物語大成所収の三系統本と異なる源氏本文が使はれたと予想する事は、可能である。

この様な目で見ると、帚木巻の語注を含む部分の中にも、若干、別本系統本による引用かと思はれるふしがある。諸本によつて割注とするものと、本行に書くものとがあるが、「わろき方へ出で

給はぬ事、御物忌といふ」の如き注記は、当然、源氏本文中の語についての注記と見なされ、帚木巻では「おさおさ」(三五一〇)「みさをもてつけて」(四九六)「さうじみ」(五一一〇)、「ひたやごもり」(五一一〇) (以下略)の如く、多くの例が見られる。だが次の例はいかがであらう。

とりならべて見る時は、まことの文字をかきしづめたるては、こよなく見まさりするもの也

の次に「こよなくとは、こゆる事なき也。無越と書たり」と注する。これは原文四八一二に当る部分で、「とりならべて見」「まこと」の語句が一致するだけで、原文の要を採って書いた部分には相異なるが、「こよなく」の語をわざわざ注してゐる所を見ると、依拠本文には、現存諸本に見えぬ「こよなく」の語があったものと見ねばならぬ。

此の種の注記は、諸本の異文をも或る程度考慮しつつ書いたものであるらしい事、「右馬の頭、物の定め博士になりて、ひらき居たり」(四六一)の所に「又ひらちふたりと有本もあり。何様さえづりたる駄也」と注する。即ち引用本文は青表紙本、「ひらちふたり」とあるのは河内本系統である(これらの例は尙、次節でも随時ふれる所がある。)

以上の諸点を併せ考へるに、帚木巻梗概化に際して使はれたのは矢張り別本系統本であったと考へてよいであらう。何故ならば、別本の規定は、純粹に青表紙本とも河内本とも判定出来ぬ、系統不明の諸本を総括する名称だからである。

三、八源氏大鏡の類V第一類本帚木巻の梗概化の実際

帚木巻の梗概化を、どの様な形で行つてゐるのかの、目安の一つとして、日本古典全書本の見出し、同巻の二十五節と対比しながら、これを示して見よう。日本古典全書本を比較の基準にしたのは、同書が類本中で最も細かく章段を分けてゐるからである。

日本古典全書「一」源氏の密事についての作者の評」(三五一〇)の数字は源氏物語大成頁数による。以下同じ)の部分は、直接八源氏大鏡V(八源氏大鏡の類V第一類本を略して以下斯う書く)には見えない。その代りに桐壺巻に於ける藤壺の記事を要約して冒頭に配してゐる事、前節に述べた所である。

「二」源氏平凡なる婦人關係を好まず」(三五五)の部分は、「しのぶのみだれや」の引歌を以て当該部分を代表させてゐる事も先に述べた。この外、この部の冒頭「まだ中将などにものし給ひし時は」の部分をして、八源氏大鏡Vは帚木冒頭に「源氏此巻に中将と聞ゆ」などの説明を加へる。

「三」頭中将、源氏と睦ぶ」(三五・三六)は、ほぼその要点を取つて書くが、「四」頭中将、源氏の宿直所を訪れ、女よりの手紙を見る」(三六・三七)の部分は、殆どふれられない。これは全体の筋にはあまり關係ないと云へば云へよう。

「五」頭中将の女性論」(三七―三九)は雨夜の品定め序論めいた部分であるが、八源氏大鏡Vは「此中将と左の馬の頭と藤の式部のせうと以上三人参りて世の中の女のよきあしきふるまひを、かみなかしも三品に分ちて定め争ひしを雨夜の品定めとは云ふ也。又、帚木の夜の言葉ともいへり」と叙べて終つてゐる。

「引まの頭は世のすきものなるを中将待ちとりて定めいふに聞きに
くき事多かり」(三九二傍線、源氏本文に異文)などと引用する点

からわかる様に、「五」の後半に重点を置いた梗概化である。

〔六〕〔七〕の馬頭の女の三階級論(三九―四二)から〔八〕馬頭の「妻たるべき女の資格を説く」(四二・四三)、又〔九〕の馬頭が奥直な女を推賞する抽象的論議(四四―四六)にかけては、煩を慮ってか、きはめてかいなでの素通りで、「たとへたるもの三あり」として「木の道」「絵」「てをかく人」の部分の比喩のみを、原文を可成詳細に引いて述べる。この詳細な部分とは〔二〕「馬頭、諸芸に托して誠実の意味を説く(四七・四八)」の部分であつてこの事から、梗概化が、則物的な理解し易い所を主としてゐるものと一見考へられる。(実は後述の如く、ここで略されたかに見える諸要素は、後の部分で生かされ、はめこまれる形になつてゐるのだが)この傾向が一層、具体的に示されるのは、この「木の道」以下三つのとへに繞いて、「その始めの事、我々が見し女どものよしあしのふるまひを申し出して 源氏に聞かせ申したり。此師匠の物語、三人して四つ申したり」と節を分つゝ大鏡Vの敘法からもうかへる。

〔二〕「馬頭の經驗談―指喰の女の話」(四八―五三)では、馬頭と女との贈答の外に、「つなびきて」「ひたやこもり」などの引歌などをあげる。本文上では「ふすべ、かけて」(五一―九)など河内本・別本との共通異文が注目される。〔三〕の馬頭の經驗談の続き「木枯の女の話」の所(五三―五五)も具体的に要約してゐる。本文上では「手つき口つき」(五三―四)の河内本諸本にない青表紙本又は別本系陽明家本と共通する異文が見られる。一方、「ことのねも」の歌の部分では第二句「菊もえならぬ」(五四―九)として河内本に近い本文を示す。次の歌の下句「ことのはもなし」とは、河内本の

類だが、別本系陽明家本に一層近いかと思はれる。弘安源氏論義などにも引かれ、中世には極めてもはやされたらしい部分で折らば落ちぬべきはぎの霞、拾はば消えんとする玉簾の上のあられなどやうに(五五七)

の人大鏡Vの句は、「消えんとする」「などやうの」の部分で河内本に一致し、別本系統も部分的に共通異文を持つ。

この木枯の女の話の終つた所、人大鏡Vは「源氏もかた多みてさる事とはおぼすべし」(五五二)と書く。これはほぼ源氏本文の敘述順に従ふものだが、これに繞く「頭の中將はましていみじく信じて、つらづゑをつきて向ひたるさま、法の師の世のことわりとき聞かせん所の心地すれど」の部分は、前節に相当する源氏本文四八の部分を引いてここにはめこんだもので、梗概作成者の芸の細かい所だらう。即ち則物的、具体的に、梗概化し易い所へと先走りして書いた挙句、前記の様に、殆ど原文を無視する様な結果となつた馬頭の談論の前半部分から、一文を生かして、馬頭の體験談の末尾に附け加へた恰好になつてゐる。類例は次にも見える。

〔三〕「頭中將の經驗談」の部分(五六―五八)も歌三首を含め筋を追ふ。只この頭中將の體験・夕顔の事を敘したすぐ次は、又、前へもどつて

さればただよき女は、ねたむべからむ事をもにくからずかすめなし、怨ずべきふしをも見しれるさまにほのめかし、それに付て心ざしもまさり、又、男の心も見る女からにをさまりもすべし(後略)(四六一)

以下「つながぬ船のうきたるためし」云々の馬頭の名論の結論部分を引き「やさしくはあれど、心弱くて身を軽くなしたる故、これは

下の品の人といへり」と言葉を加へる。夕顔を「下の品の人」と評する事は、梗概作成者が「かみなかしも三品に分ちて定め争ふ」と云ふ雨夜の品定の首尾結構を意識しての事とは云へ、やや酷に過ぎる。梗概化を第一義として、作中人物への共感は二の次にした鑑賞享受の態度と申すべきだらう。同時に又、梗概作成者は、夕顔が突然行方をくらましてしまった事実が、「八九」の馬頭の云ふ「人の心を見知らぬやうに逃げ隠れて人を惑」す、馬頭が幼時女房から聞いた物語の女と一筋通ずる特徴のある事を念頭に置いての処置と見てよからう。

続く「四三」「藤式部の経験談」(五九一六一)は、同節の二首の歌をあげ、具体的に筋を追ふ。「四五」の馬頭の「女性論を総括」する所は、又、前の馬頭の論「八九」などから引き抜いて来て、「四五」の部分自体の本文をあまり忠実に要約しない。即ちこの「四五」に相当する所を、△大鏡▽は、

たもたるる女のためも心にくかるべし(四二三)とあればかかりあふさきるさにて、なめのにさても有りぬべき人の有がたきなり

(四一一)

と云ふ様に「八九」の各所から文を拾ひ集めたり、

かみはしにも助けられ、しもはかみになびきて、事広きにゆづらふべし(四一九)

の次には、「八九」の「馬のかみ、物の定めめの博士になりてひらき居たり」(四六二)を続けたりして、「一五」の内容には殆どふれる所がない。

雨夜の品定めの終った所で一区切をつける段落意識は、梗概作成者も明確だったと見えて、最初を「一、此巻に品定めという事あ

り」と書き出し「品定め雨夜明ぬ」でこの段を終ると、「一六」

「源氏左大臣邸に赴く」節では、

一、からうじて今日は日のけしきもなをりたれば、大殿へ出で給へるに(下略)(六三)

と区割を示して、「一」を標記してゐる。「一六」についてはこれだけですまして「一七」の「中川なる紀伊守の宅に方違を」する所へ△大鏡▽はすぐ続ける。

「一七」及び「一八」「紀伊守、源氏を欲待す」る条では、中川の家の自然の風物を点描して事の推移を書くが、「一九」「源氏、空蟬姉弟の身の上を聞く」条(六・七)は、源氏原典が、源氏と紀伊守との会話の中で、空蟬・小君の素姓を読者に示して行くのに対して、△大鏡▽は

紀伊守が父伊予介は国に居たり。今の北の方は、さるべき公卿の娘なるを、親なく世におとろへて、伊予介がめになれり。此ころは紀伊守が家に宿もしたり。此事を源氏よく聞き定め給て、伊予介の北の方のふしたる所へ忍び入り給へり

と概述する。「一九」の前後をも含めて空蟬の人物説明をした形式である。この辺、源氏原典の「武部卿の宮の姫君に朝顔奉りし歌など」を女房たちが噂するなど(六五)の注目すべき条は、梗概作成者から全く無視されてゐる事、申すまでもない。△大鏡▽が

かくて端の方のおましに御殿籠りぬ(六六五)いたづらぶしとおぼさるるに御眼さめて、(六七九)

と云ふ様に、「一八」末尾の原文と「二〇」冒頭部の原文をつなぎ合はせて書いてゐるのも、「一九」の場面そのものをあまり重く見てゐない証である。唯、先にも例があつた様に、ここで紹介しなかつた小

君の事は、先の部分で、この(「一九」)の原文を引きつつ説明すると云ふ常套手段を使つてゐる。(「一九」)で小君を説明してゐないのだから、(「二〇」)「空蟬、隣室に臥し小君と語る」場は、梗概化されずに除外されるのも当然である。

(「二二」)「源氏空蟬に忍び一夜を語らふ」(「六八—七二」)、(「二三」)「源氏空蟬と和歌を贈答して別る」(「七一—七三」)の二条は、一つのやま場であるから、原文を踏へ相当細かく梗概化している。勿論、原歌二首も引用する。この部分でも、空蟬の心理を描くに際して、帚木卷末尾近くの最終段(「二五」)から文を借用して、(「大鏡」)は「過ぎにし親の影とまりたるふるさとならば、をかしくも思ふべきに」(「七七—七九」)を配置した後へ、空蟬の返歌「身のうさを」(「七二—七九」)を書く。

(「二三」)「源氏左大臣邸に帰り紀伊守を召し小君を所望す」る条(「七三—七四」)で、小君がはじめて紹介されるのだが、ここでは先の(「一九」)で引用されなかつた場面を復活させて

此女君のおとゝのわらはは十二三ばかりなるが、紀の守が家に有しを御覧じおきてと書き、空蟬への文使をさせる経緯を述べる。

(「二四」)「源氏小君を語らひ空蟬に消息す」る条では、源氏の虚言「我らは伊予の翁よりは先に見し人なれども、たのもしげなく、首細しとて、ふつつかなる後見まうけて、かくあなづり給ふなり」(「七五—七八」)などまで引く。勿論「みし夢を」(「七四—七五」)の歌は引用してゐる。が、小君が空蟬からたしなめられる事などにはふれず、「御返事も申さず」ですましてゐる。総じて源氏と女との交渉にスポットが当てられ、その媒たる小君と空蟬・小君と源氏の個人的交

渉に多少でも近い事項は略されてゐる様である。

(「二五」)「源氏再び中川の家を訪れ、空蟬に逢はんとして果さ」ぬ帚木卷最終段は、紀伊守が「遺水のめいばくとかしこまり申」す事までふれて詳細に敘する。が、先にもふれた通り、空蟬の心に悩みもたへる描写の骨子部分が、既に(「二三」)(「二三」)段に引用されてしまつてゐるために、当事者の男女二人の心理までは、この段の梗概に充分には描かれてゐない。

(「大鏡」)帚木卷は源氏と空蟬との贈答歌で終るわけだが、次の空蟬巻との承接関係について一言するなら、空蟬冒頭、(「大鏡」)は「此女のかくつれなきを人にかはりて、ねたうも心にくも思し召す。今一度たばかれと語らひ給ふ」(以下略)

に始まる。即ち、帚木・空蟬の關係は、源氏原典では帚木末と空蟬冒頭が同夜の事であり、空蟬冒頭は、空蟬に会へなかつた源氏が空しく帰る敘述である。これは(「大鏡」)では全く取りあげてない。

もう一つ附加すれば、帚木卷に、(「大鏡」)は「この歌どもによりて巻を帚木と名付け、女をも帚木の君といふ。歌以上十四首あり」の註記があり、女主人公を空蟬の名前で呼んではゐない。空蟬と呼ばれるには、空蟬巻の終りまで行かねば、その呼称の由来がまだないのだから致し方ないが、空蟬巻では、帚木卷末の様な、「この歌の故に彼女を空蟬と呼ぶ」と云ふ類の註記はない。古系図の類、多くは空蟬の尼の名称を以て呼ぶが、「帚木の君」の呼称は(「大鏡」)と接觸關係を保つ本の認定に一つの指標を与へる材料とできよう。但し、第三類本(架藏源氏大鏡など)には「女をも」以下がない。

以上、本稿に於ては、前稿で詳述し得なかつた△源氏大鏡の類Vの物語梗概化の方法・実態がどのやうなものであるかを、帚木巻の實際に當つて検討を加へた。この結果、

一、帚木巻に於ても、他の巻と同様、梗概化に當つて使用した源氏テキストは、別本系統の一本であつたらうと思はれる。且、異本・異文にも注意を払つて注記する一面が見られる。

二、梗概化に當つて、巻中の和歌はすべてこれを網羅し、引歌・出典の類は、重点的に煩雜にならぬ程度に此を加へてゐる。

三、梗概化は源氏テキストに生起する事件の順序を必ずしも忠実に追ふ事なく、便宜に従つて、時に極めて綿密、或時には省略に従ふと云ふ態度である。

四、梗概化に當つて、原テキストの辞句を出来るだけ生かして使用しようとする意図が明確にうかがはれるが、原典の辞句を原典の使用されている場面の梗概に利用するだけに留まらず、転用出来る他の場面の中にこれをはめこむと云ふ、技巧的な工夫をこらしてゐる。(これと似た態度は「夜半の寢覚」とその改作たる中村本との間にも見られる。鈴木弘道氏「平安末期物語の研究」参照)

以上の諸点が指摘できる。特に最後の一項は、原典の辞句の端々までに精通し、明確な意図と抱負を以て梗概を書き進めてゐる事を思はせる。この点、梗概作者の学識・態度をうかがはせるに足るものであらう。

(広島大学助教授)